

以通過儀禮觀點閱讀村上春樹《神的小孩們都在跳舞》
—面對心靈創傷的小說裝置—

曾秋桂

淡江大學日文系教授

摘要

2011年村上春樹在接受泰隆尼亞國際獎頒獎典禮上，發表了「非現實的夢想家」的演講。演講中曾提及「東日本大震災」(2011.3.11)。當思考村上與震災的關係時，不得不提及《神的小孩們都在跳舞》這一部短篇集。因為1995年1月17日日本發生了阪神大地震，迫使村上自主性地結束4年半的美國生活而回到日本。又於當年的3月20日發生東京地鐵沙林事件震驚了日本全國。村上訪問了引發地鐵沙林事件的奧姆真理教幹部以及受害者而集結成《地下鐵事件》(1997)、《約束的場所》(1998)書籍問世。1995年日本發生了一連串的大事件，使得村上感覺到日本戰後神話的崩潰，於是想在小說中描繪「類似「鼓舞士氣」的東西」而成的《神的小孩們都在跳舞》。

本論文以蘊涵非超越不可的試煉含意之「通過儀禮」為觀點，考察了《神的小孩們都在跳舞》中「類似「鼓舞士氣」的東西」。而所得的結果為：該作品中裝置了面對心靈創傷的機制，不論是否能走出心靈創傷，勇敢面對心靈創傷就是一大突破，意義非凡。而之後心靈創傷主題，在村上文學創作中愈加明確。此可謂是村上本身於1995年所受到了創傷衝擊，進而創痛經驗的結晶。

關鍵字：阪神大地震 東京地鐵沙林事件 1995年 鼓舞士氣
心靈創傷

An argument on "all the children of God dance" by Haruki Murakami seen as a rite of passage: As an equipment of the tale facing a trauma

Tesng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

By the memorial lecture of the Catalonia international prize, Murakami mentioned the "Great East Japan Earthquake" (2011.3.11). When considering the relation between Murakami and an earthquake disaster, it attracts attention that revalued U.S. stay of four years and a half and Murakami who returned to Japan hit by the Great Hanshin-Awaji Earthquake (1995.1.17) and Sarin nerve-gas attack on the Tokyo subway system (1995.3.20) has written the first short story collaboration collection "All the children of God dance" (2000.2). Murakami says that he would like to draw "a thing like "morals" in "All the children of God dance."

This research has tried consideration of the "morals" in "All the children of God dance." from a viewpoint of a "rite of passage." As a result, this research has found that the equipment which faces a trauma is devised by the collection of works and its common theme that facing a trauma had a meaning. The equipment of tale called a trauma is an important theme of the Haruki Murakami literature of the 2000s. It can also be said to be the crystal which has condensed the fact of the shocking earthquake disaster in 1995 which the writer has received.

Keywords: Great Hanshin-Awaji Earthquake, Sarin nerve-gas attack on the Tokyo subway system, 1995, morals, trauma

通過儀礼として見た村上『神の子どもたちはみな踊る』論 —トラウマと向き合う物語の装置—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

要旨

カタルーニャ国際賞を受賞した2011年6月9日に、村上は記念講演「非現実的な夢想家」で「東日本大震災」(2011.3.11)に触れた。村上と震災の関係を考える時には、4年半のアメリカ滞在を切り上げて、阪神・淡路大震災(1995.1.17)に見舞われた日本に帰った村上が刊行した地下鉄サリン事件(1995.3.20)による被害者、加害者へのインタビュー『アンダーグラウンド』(1997)、『約束された場所』(1998)と、初短編連作集『神の子どもたちはみな踊る』(2000.2)を考察しなければならない。1995年に起きたこれらの事件を見て戦後神話の崩壊に感づいた村上は『神の子どもたちはみな踊る』に「モラル」のようなもの」を描きたいと表明したからである。

超えなければならない通過点の意味を持つ「通過儀礼」の観点から『神の子どもたちはみな踊る』における「モラル」の考察を試みた結果、作品中にはトラウマと向き合う装置が仕掛けられ、トラウマの克服の可否はともかく、まずトラウマと向き合うことに意味があるという意思表示が見られた。また、トラウマという物語の装置がその後の村上文学で次第に明確なテーマとなってきたのは、村上自身の受けた1995年の大震災とテロ事件による衝撃があり、それを凝縮した結晶ほかならないとも言えよう。

キーワード：阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件 1995年
モラル ト라우マ

通過儀礼として見た村上『神の子どもたちはみな踊る』論 —トラウマと向き合う物語の装置—

曾秋桂

淡江大学日本語学科教授

1. 村上春樹と震災

カタルーニャ国際賞を受賞した2011年6月9日に、村上は受賞記念講演「非現実的な夢想家」で「三位一体の受難」¹（地震・津波・原発事故）と言われた「東日本大震災」（2011.3.11）に触れたことがある。その講演の中で、3・11のような悲惨な実態に触れて、「我々日本人は核に対する『ノー』を叫び続けるべきだった」²と意見を述べた。村上と震災との関係を考える際には、1995年1月17日に起きた阪神大震災のことを想起せずにはいられない。まず、村上と震災との関連を整理してみよう。阪神・淡路大震災発生時（1995.1.17）、村上はまだアメリカ滞在中であった。テレビを通して、震災地神戸の様子を見た村上は「胸が激しく痛んだ」³。その後さらに、オウム真理教団による地下鉄サリン事件（1995.3.20）が起こった。こうした一連の事件を見た村上は、「1995年は日本にとってまさに激動の年」⁴だと見て、「戦後日本というひとつの神話とそのひとつの使命を終えようとしていた」⁵と認識した。1995年6月に「僕は日本語で小説を書く日本人の作家として、それなりの責任のようなものを

¹マニュエル・ヤン(2012)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社 P93では、「3・11における三位一体の受難（地震/津波/原発事故）は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。

²NHK 科学文化部のブログ「完全版：村上春樹さんカタルーニャ賞受賞スピーチ」<http://www9.nhk.or.jp/kabun-blog/200/85518.html>（2013年7月31日閲覧）

³村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑤ねじまき鳥クロニクル2』講談社 P433では、「年が明けて1995になり、すぐに神戸の震災があった。そこは僕が青春時代を過ごした街であり、異国のテレビの画面でその崩壊ぶりを目にしていると、胸が激しく痛んだ」とある。

⁴村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑤ねじまき鳥クロニクル2』講談社 P433

⁵村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑤ねじまき鳥クロニクル2』講談社 P433

感じていたし（それは正直言ってアメリカに来る前にほとんど意識しなかったことだ）、日本とのコンタクトを失うわけにはいかなかった。日本に戻ることに迷いはなかった」⁶と本心を述べたように、4年半ほどのアメリカの滞在を切り上げて、日本へ帰ってきた。日本とコンタクトしたいという気持ちが、帰国後1996年の河合隼雄と対談の中で、デタッチメント（関わりのなさ）からコミットメント（関わり）へと⁷、より積極的な社会的関与という明確な形として具現した。

日本とのコンタクトを実践したかのように、帰国後の村上は早速9月に故郷の震災地神戸と芦屋に出向かい、チャリティーの自作朗読会を実施し、その収益を神戸市と芦屋市の被害を受けた図書館に寄付した⁸。また、地下鉄サリン事件の被害証言者にインタビューした『アンダーグラウンド』（1997）を刊行した。刊行後、小説を書くことに行き詰まって、地下鉄サリン事件を利用して本を書くという批判に対して、村上が「この本（『アンダーグラウンド』のこと・論者注）を書くという作業に身を投じてみよう」⁹と表明したうえ、「僕にとっての小説というのは、丁度自分の中に深く埋もれている遺跡を発掘するようなものです」¹⁰と強調し、取材に応じて証言者の「彼らの声は僕の声であり、僕の声は彼らの声でもあるのです」¹¹と弁明した。1998年にオウム教団の幹部達にインタビューした

⁶村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑤ねじまき鳥クロニクル2』講談社 P433

⁷村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑦約束された場所で村上春樹、河合隼雄に会いに行く』講談社 P253 では、「コミットメント（関わり）」ということについて最近よく考えるんです。たとえば、小説を書くときでも、コミットメントということがぼくにとってものすごく大事になってきた。以前はデタッチメント（関わりのなさ）というのがぼくにとっては大事なことだったのですが」とある。

⁸清水良典（2006）『村上春樹はくせになる』朝日新聞社 P50

⁹村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑥アンダーグラウンド』講談社 P694

¹⁰村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑥アンダーグラウンド』講談社 P697

¹¹村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑥アンダーグラウンド』講談社 P698

『約束された場所で』¹² (1998) を刊行した。その後、どうしても阪神大震災について書こうとした村上は、その理由を「どちらかひとつだけでは片手落ちだと気がしたから」¹³と挙げて、「それら二つ（地下鉄サリン事件・オウム教団と、阪神大震災・論者注）をあわせることによって、戦後日本の五十年の歴史に、ひとつのはっきりとした終止符が打たれることになるのだ」¹⁴（下線部分は論者による。以下同様）と主張している。そして、阪神大震災について書き上げた『神の子どもたちはみな踊る』（以下、『神の子どもたち』と略す）は、深いところで、『アンダーグラウンド』と繋がっている¹⁵と村上は説明を付け加えた。以下、『神の子どもたち』を具体的に見てみよう。

2. 問題提起一通過儀礼として見る震災後連作『神の子どもたち』

村上の初短編連作集『神の子どもたち』は2000年2月に刊行された。それは、最初に「連作『震災のあとで』その一～その六」という名で続く「UFOが釧路に降りる」、「アイロンのある風景」、「神の子どもたちはみな踊る」、「タイランド」、「かえるくん、東京を救う」（『新潮』1999.8-12連載）の5連作に、書き下ろしの「蜂蜜のパイ」が加えられ、「震災のあとで」の一語が削除された形で出版された単行本である。ちなみに、単行本『神の子どもたち』は『after the quake』（2002.7）というタイトルでアメリカで訳され¹⁶、9・11の打撃を受けただけに、「カタストロフのあとに来るもの」という文脈から米国の読者からの反応は驚くほど真剣だった¹⁷そうである。

¹²『文藝春秋』に1998年4月号から11号まで連載されたものが纏められた。

¹³村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P270

¹⁴村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P270

¹⁵村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑥アンダーグラウンド』講談社 P699では、「『アンダーグラウンド』が『神の子どもたちはみな踊る』のベースになったということではもちろんないのだが、僕としては、その二つの作品はどこか深いところで繋がっているような気がするのだ」とある。

¹⁶村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P275

¹⁷村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P275では、「世界貿易センタービル事件のあとにただで、カタストロフのあとに来るもの」という文脈で、アメリカの読者からの反応は驚くほど真剣なもの

興味深いことに、日本では、「震災のあとで」の一語が削除されたのに対して、アメリカでは、削除された「震災のあとで」を復活させ、大災厄の後の文脈の作品として読まれているのである。いずれにせよ、『神の子どもたち』は阪神大震災をきっかけに書かれた作品であることに相違ない。

また、雑誌『新潮』に連載した5作品は、実は一般的に考えられる連載の形を取ったわけではなく、村上自身が「連載という形がどうも苦手なので、一度にまとめて書いてしまって、それを順次掲載するというかたちをとった」¹⁸と打ち明けたように、「蜂蜜のパイ」以外の5連作は、作者の言葉が本当ならば実は一気に書き上げた作品なのである。ここで、『神の子どもたち』に関して、まず、二つの事項を確認しておきたい。一つ目は、単行本を発行する際に、連載時の「震災のあとで」の一語が削除されたことにより、最初は前景化されていた震災が後景化することになることである。震災を後景化したことにはどんな意図があるかは当然考えなくてはならない課題である。二つ目は、「比較的短期間だが、かなり集中して書いた」¹⁹と村上が打ち明けた創作態度に鑑みて考えると、順次連載する形を取った場合は、創作する時間の隔たりがあるため、作品間の連続性が失われてしまう恐れがあるが、一気に書き上げられた『神の子どもたち』なら、連作に表面では連続性が見られなくとも、その根底にはきっと通底しているものがあるはずだという仮定は可能性が高まるであろう。

このような特徴を持った『神の子どもたち』を書いた前後の気持ちを、村上自身は次のように回想している。長い引用だが、そのまま引用する²⁰。

バブル経済が破綻し、巨大な地震が街を破壊し、宗教団体が

だ」と村上春樹が述べている。

¹⁸村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P268

¹⁹村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P268

²⁰村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P274

無意味で残忍な大量殺戮を行い、一時は輝かしかった戦後神話が音を立てて次々に崩壊していくように見える中で、どこかにあるはずの新しい価値を求めて静かに立ち上がらなくてはならない、我々自身の姿なのだ。我々は自分たちの物語を語り続けなくてはならないし、そこには我々を温め励ます「モラル」のようなものがなくてはならないのだ。それが僕の描きたかったことだった。(中略)もし、僕は『アンダーグラウンド』という仕事をしなかったら、僕はおそらくそのような心持ちを強く抱くこともなかったかもしれない。そういう意味では、『アンダーグラウンド』の仕事は僕にとってのひとつの里程碑のようなものになったし、『神の子どもたちはみな踊る』はその里程碑を越えたあとの新しい一歩だったということもできる。

前後になるが、二つ目の下線部分から見よう。「『神の子どもたちはみな踊る』はその里程碑を越えたあとの新しい一歩だったということもできる」が示唆しているように、『神の子どもたち』は、村上文学においては記念すべき作品で、いわば文学創作の一里塚を通過した後の新しい一歩を象徴する通過儀礼の意味が含まれた小説だと言えよう。なお、通過儀礼は、ファン・ヘネップ(1873—1959)が儀礼を初めて体系的に論じ、個人の誕生から死までの折々の儀礼などを分離期・過渡期・統合期の3つの過程に分けて、「通過儀礼」の視点で捉えた成果²¹として、文化人類学を始め社会文科系研究で広く援用されている狭義の概念を指す。だが、本論文での通過儀礼は、広義的に「必ず超えなければならない通過点」と言った一般概念で用いる。戦後神話の崩壊後の村上春樹文学の成長過程を通過儀礼として見ると、その一里塚とされている『神の子どもたち』における中心テーマ「モラル」のようなものの究明は、村上春樹の研究では避けて通れない課題の一つであろう。そこで、本論文では、全6作

²¹ファン・ヘネップ著綾部恒雄・綾部裕子訳(2012)『通過儀礼』岩波書店

品を共通している主題を究めることによって、震災後、唯一の震災関係短編連作集『神の子どもたち』で村上が描きたかった「我々を温め励ます『モラル』のようなもの」の究明を目的とする。

3. 『神の子どもたち』に関する作品の詳細

『神の子どもたち』に収録された6作品を作中時間、主人公、作品場所、主人公が抱えているトラウマ、小道具あるいはキーワード、他の著作との関連の6項目に分けて、その詳細を表1に整理した。その表1から読み取れたことを以下に述べよう。

表1 『神の子どもたち』における6作品の詳細

作品名/作中時間(6作品とも第三人称視点小説)	主人公(年齢か出生)/予言者(あるいは*仲間)	場所	トラウマ	小道具あるいはキーワード	他の著作との関連
①UFOが釧路に降りる/2月	男性小村(31歳・1964年の生まれ)/シマオ	東京/北海道釧路	妻に家出されたこと/不可解さ/解離	空気のかたまり(P13)/木で出来た骨箱(P17)/熊(P24)/中身がないこと(P35)	妻の失踪が『ねじまき鳥クルニクル』(1992-1995)に先行。
②アイロンのある風景/2月	男性三宅(40代半ば・1950年の生まれ)/順子	茨城県鹿島灘	冷蔵庫への恐怖/夢	夢(P60)/からっぽ(P64)	
③神の子どもたちはみな踊る/2月	男性善也(25歳・1970年の生まれ)/田端/善也の母・1952年の生まれ	東京	「父なるもの」・「母なるもの」などの人間存在の根源的な暗闇への不安	暗くて思い沈黙する石の心(P83)	父殺しと母の相姦が『海辺のカフカ』(2002)/『1Q84』(2009-2010)に継承。
④タイラント/2月	女性さつき(更年期を迎えた、1945年前後の生まれを推定)/老女	バンコク	夫への憎しみ/夢	白い堅い石(P121)/石(P124)/北極熊(P124)/言葉は石になる(P123,125)	

⑤かえるくん、東京を救う/2月	男性方桐（40歳・1955年の生まれ）/かえる	東京	コンプレックス/昏倒		
⑥蜂蜜のパイ/不明	男性淳平（36歳・1959年の生まれ）/*小夜子	東京	捨て難い19歳の初恋	箱（P166.198）/地震男（P166）	捨て難い初恋が『ノルウェイの森』（1987）に先行、『1Q84』（2009-2010）に継承。

説明1 主人公の仲間のような人物の名に「*」をつけておく。

説明2 網掛は論者による。

3.1 距離を取るような作中時間・空間の設定

「蜂蜜のパイ」の作中時間は明示されていないが、村上の説明²²では、6作品とも作中時間を阪神大震災が起きた1995年1月の翌月2月に設定したという。この2月は、周知のように、丁度阪神大震災と地下鉄サリン事件との間に挟まれている。なぜ2月に設定しなければならないのかについては、村上本人が、「不安定な、そして不吉な月だ。僕はその時期に人々がどこで何を考え、どんなことをしていたのかそういう物語を書きたかった」²³と説明している。また、空間を「タイランド」のような外国のバンコクに設定した作品をはじめ、他の5作品もいずれも震源地の神戸ではなく、神戸と遠く離れた東京近辺ないし北海道にしている。空間の設定については、村上は、「その地震がもたらしたものを、できるだけ象徴的なかたちで描くことにしよう。つまりその出来事の本質を、さまざまな『べつのもの』に託して語るのだ」²⁴と創作方針を披瀝し、「地震という題材を直接にはとり扱わないことにしよう」²⁵と努めている。このように、時間的にも空間的にもわざわざ震災と距離を取り、焦点を震

²² 作品中には時間が明示されていない。しかし、村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P268 では、「これらの六編の短編小説においては1995年2月に起こった出来事が描かれている」と村上春樹が述べた。

²³ 村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P268-269

²⁴ 村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P271

²⁵ 村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社 P271

災からずらしながら、震災にアプローチしていくといった迂回的な描き方が特徴的である²⁶。

3.2 第3人称視点小説の獲得

そうした設定と呼応するかのように6作品とも今までの村上の創作では稀な第3人称視点²⁷で創作に臨んだことは、特筆すべきであろう。この点については、村上自身が、「視点を大きく散らしていくことによって、これまでにない新しい書き方ができたし、新しい作風のようなものがそこに生まれたと思うからだ」²⁸と述べて、実験的とも言える第3人称視点小説のメリットを全面的に肯定している。

3.3 主人公の設定の特徴

6作品は、今までの第1人称視点で臨んだ創作とは違って、第3人称視点で書かれたにも関わらず、「タイランド」以外の5作品の主人公は従来の通り全て男性である。また、その年齢を逆算すると、多くは1950前半の生まれ、ないしその子供に当たる世代で、いわば、団塊の世代²⁹または団塊ジュニア³⁰を念頭に置いていることが分か

²⁶野中潤(2012)「<悲観的な希望>を生きる―連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』論」宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九九〇年代』P73では、『神の子どもたちはみな踊る』を「阪神・淡路大震災を経て地下鉄サリン事件という次のカタストロフに遭遇することになるかもしれない人びとの「傍観者」的なありようを、連作という形で形象化しようとした小説集」だと位置づけている。

²⁷村上春樹(2003)「解題」『村上春樹全作品1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社P272では、「短編集『レキシントンの幽霊』では7作品中6作品までが、多かれ少なかれ一人称で書かれている」と村上春樹が述べた。

²⁸村上春樹(2003)「解題」『村上春樹全作品1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社P272

²⁹「平成20年日本厚生労働白書」(<http://www.mhlw.go.jp> 2013年7月26日閲覧)の第2章第1節によると、第一次ベビーブーム時代の1947年から1949年までの3年間に出生した世代を「団塊の世代」と言う。さらに、日本財務省がニッセイ基礎研究所に委嘱し、2005年8月に発表した「我が国における「団塊の世代」退職及び少子高齢化が、経済・金融に与える影響について」調査報告書(<http://www.mof.go.jp> 2013年7月26日閲覧)では、戦前の1943年から1946年までの生まれを「プレ団塊の世代」と言い、1950年からから1953までの生まれを「ポスト団塊の世代」と言う。一般的に戦後から1950年代前半までの生まれを広義的に「団塊の世代」と言う。本論文では、広義的な言い方を採ることとした。

³⁰「平成20年日本厚生労働白書」(<http://www.mhlw.go.jp> 2013年7月26日閲覧)の第2章第1節によると、第二次ベビーブーム時代の1971年から1974年までに出生した世代を「団塊ジュニア」と言い、いわゆる団塊の世代の子供世

る。団塊の世代または団塊ジュニアを男主人公にしたことは、『神の子どもたち』までの村上作品によく見られる男主人公の世代的特徴³¹とあまり変りはない。そして、この6作品の主人公たちが各自の人生の軌道に乗って、各自の生活を営んでいることは、まさに、『神の子どもたち』を書いた前後の村上が回想した「我々は自分たちの物語を語り続けなくてはならない」という言葉と暗合し、6作品の主人公を含む「我々」が語り続ける物語にある「モラル」を描きたい村上の信念の表明にほかならないのである。

3.4 マス・メディアを通してしか伝わらない震災の様子

6作品に登場した人物の中で、震災の被害を直接に蒙った人は一人もいない。震災関係者から直接に話を聞いたこともなく、いずれも新聞記事やテレビニュースを通して震災のことに触れる形式を取っている。特にテレビに映った映像を見た衝撃の影響による PTSD（心的外傷後ストレス障害、Post Traumatic Stress Disorder）、いわば、精神医学で言う「遠隔被災」³²、「テレヴァイズ・カタストロフ」(televised catastrophe)³³が生じた様子を中心に描かれている。例えば、「UFO が釧路に降りる」では、5日間震災テレビニュースを見続け、メモを残し、家出をした小村の妻は離婚の話まで小村に持ち出した。また、「蜂蜜のパイ」では、4歳の沙羅が「神戸の地震のニュースを見すぎたせい」(P166)か、「真夜中過ぎにヒステリーを

代のことである。ちなみに「団塊ジュニア」という呼び方は、田中勝の『感性時代のニューシーンメーカー 団塊ジュニアの総合研究』(1985)日本能率協会総合研究所に初めて使われた。

³¹例えば、処女作『風の歌を聴け』(1979)の「僕」(1949年の生まれ)、『ノルウェイの森』(1987)の「僕」(1949年の生まれ)、『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)の「僕」(1949年の生まれ)、『国境の南、太陽の西』(1992)の「僕」(1951年の生まれ)、『ねじまき鳥クルニク』(1992-1995)の「僕」(1956年の生まれ)などである。このように、村上作品に登場した男主人公がポスト団塊を含んだ団塊の世代になるであろう。

³²斎藤環(2008)『文学の断層セカイ・震災・キャラクター』朝日新聞社 P226

³³中井久夫(1995)「災害がほんとうに襲ったとき」中井久夫編『1995年1月・神戸「阪神大震災」下の精神医たち』みすず書房。同じ視点に立って、香山リカの研究(「被災地外」について考える)『現代思想臨時増刊』39巻12号2011年9月青土社 P21-25)では、同じ現象も3・11以後に被災地以外の東京、大阪で起きたという。

起こしてとび起きる。震えがしばらく収まらない」(P166)。

以上述べたように、『神の子どもたち』の設定は、第3人称の視点から語った、社会で中心的役割を果たしている団塊世代ないし団塊ジュニア世代によって「語り続けなくてはならない」、大震災の間接的影響の物語の集成だと言えよう。

4. 『神の子どもたち』の主人公の持つトラウマと対処

以下では、トラウマをキーワードにして、連作を通底するストーリーの構造について考察する。

4.1 「PTSD」と「トラウマ」との相違

まず本章の主題に入る前に、震災をきっかけによく言われる PTSD (心的外傷後ストレス障害) とトラウマについて、まず見ておこう。

村上は、対談で河合隼雄に PTSD について質問した際に、「大きなショックを受けた人が、しばらくの間普通にがんばっているんですけど、ずいぶん長い間経ってから、突然症状が出るという現象」³⁴の説明を受けた後、「自分の受けた傷とかトラウマを、自分のなかで処理することができないということですか、かたちにすることができない」³⁵と理解した。PTSD とトラウマとの関係については、精神医学の観点から斎藤環は、「PTSD とは、そのトラウマの存在からさまざまな精神症状が生じて日常生活にも支障を来す病気」³⁶だとし、「なってみて初めてわかるのが PTSD であり、治療の中で事後的に見出されるものがトラウマなのだ」³⁷と両者の相違を詳細に説明している。また、宮地尚子の説によれば、PTSD は「トラウマ反応の一部にすぎ」³⁸ず、「さまざまなタイプのトラウマ体験の後に共通してお

³⁴村上春樹(2003)『村上春樹全作品 1990～2000⑦約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いに行く』講談社 P259

³⁵村上春樹(2003)『村上春樹全作品 1990～2000⑦約束された場所で 村上春樹、河合隼雄に会いに行く』講談社 P260

³⁶前掲斎藤環書 P198

³⁷前掲斎藤環書 P201

³⁸宮地尚子(2013)『トラウマ』岩波書店 P14

こりやすい反応を集めており、トラウマの中核部分をなしている」³⁹という。さらに、「人間の「成熟」においてトラウマが不可欠である（中略）外傷を受け入れ、それを癒痕化していく過程の反復こそが、学習であり成長である」⁴⁰と、斎藤環は人間の精神的成長におけるトラウマの持つ成長を促進する通過儀礼的意味を肯定的に見ている。

4.2 各主人公が抱えたトラウマ

トラウマは作品間の連結を理解する重要なキーワードである。6作品の主人公は、ともにトラウマを抱えている点で連作を通底する。震災の故、心の奥深い所にあるトラウマが掘り起こされたのである。これこそ、単行本として発行する際に、「震災のあとで」の一語が削除されたことにより生じた前景化から後景化への変化に呼応する点だと考えられよう。逆説的に言うが、作品名でも内容的にも阪神大震災とは直接的にかかわっていないように仕上げたことから、逆に震災が個人の内的トラウマを引き出すきっかけとして、その関わりが重要な契機として底流していることが分かる。ここからは、震災前に心の整理がまだ出来ていない未自覚な状態から、トラウマと向き合う、あるいは向き合わざるを得ない物語に仕上げる装置のスイッチを震災が握っていることが見て取れよう。余談だが、こういった書き方は、3・11以後に発表された震災関係の作品角田光代の「ピース」⁴¹にも継承されている。震災の影響は、直接的な物理的被害から生じる影響ばかりではなく、経験をさまざまな形で共有した人々に大きな心理的ショックを与えることで、今まで気づかなかった重要な何かを気づかせる精神的作用を持っていることを作品は暗示しているのである。

具体的に見ていくと、「UFOが釧路に降りる」の小村は前述の「遠隔被災」を受けた妻の家出から大きなショックを受けた。その後、

³⁹前掲宮地尚子書 P14-15

⁴⁰前掲斎藤環書 P201

⁴¹鈴木哲発行(2012)『それでも三月は、また』講談社に収録された書下ろしの作品であり、書き方が村上春樹の手法に似ている。

友人に頼まれて、北海道の釧路に赴いた。そこに着いた後、小村は「コーヒーは実体としてではなく、記号としてそこにあった」(P19-20)、「遠くに来たような気があまりしない」(P21)と言った PTSD (心的外傷後ストレス障害)⁴²の症状を現した。また、「アイロンのある風景」の三宅は、「冷蔵庫のあるところでは落ちついて寝られ」(P53)ない。それにしても、「冷蔵庫の中に閉じ込められて死ぬ」(P53)ことを願った三宅は、いつも「冷蔵庫の奥からひゅっと手が伸びてきて(中略)その手が俺の首をつかんで、すごい力で冷蔵庫の中に引っ張り込む」(P60)ような夢を見ていた。これも PTSD の症状⁴³と捉えられる。阪神大震災の話題の続きで神戸にいる家族をもっと大事にするように、「焚火フレンド」(P55)の順子に頼まれた時、その家族の話を「したくない」(P58)と返事した描写から、三宅のトラウマは家族にあると推測されよう。さらに、「神の子どもたち」の善也は、「勉強の成績はまずまずだったが、スポーツに関しては救いようがなかった。足は遅かったし、ひよろひよろしていて、近眼で手は不器用だった」(P74)。「父なるものの限りない冷ややかさだった。暗くて重い沈黙する石の心」(P83)のように感じた善也は、「お父さんである神様」(P82)への信仰を捨てた。一方、「息子である僕だっていまだにろくでもない妄想に追いかけている」(P94)善也は、かつて「母親と致命的な関係におちいることを恐怖するがゆえに」(P72)性欲を風俗店に通って処理した。このような善也は、「父殺し」と母親との「近親相姦」という人間存在の根源的暗闇への不安をトラウマに抱えている。一方、「タイランド」では、別れたアメリカ人の夫を「三十年間にわたって憎み続けた」(P122)さつきに向かって、予言者の老女は、さつきの体の中に「白くて堅い石」(P118)が入っていると指摘した。夫への憎しみが強く固まったことは、確かに震災後、神戸に住んでいる夫が「家がべっしょんこに

⁴²前掲斎藤環書 P198-199 では、「「解離」といって、心の中に断裂が走り、現実感が希薄になったり、記憶が飛んだり、別人格になったりするような症状を伴うこともある」とある。

⁴³前掲斎藤環書 P203

つぶれていけばいいのに（中略）あたなが私の人生に対してしたことを思えば、私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたことを思えば、それくらいの報いがあるって当然ではないか」（P110）とさつきの心中に溢れんとする思いで言い尽くされよう。30年も続く夫への恨みは、まさにさつきがずっと抱えているトラウマであろう。そして、「かえるくん、東京を救う」でも、「私はとても平凡な人間です。いや、平凡以下です。（中略）職場でも私生活でも、私のことを好いてくれている人間は一人もいません。口べただし、人見知りするので、友だちを作ることもできません。運動神経はゼロで、音痴で、ちびで、包茎で、近眼です。乱視だっただけです。ひどい人生です。ただ寝て起きて食って糞をしているだけです」

（P144-145）と東京を震災から救おうと誘われたかえるくんという登場人物に方桐は自分のコンプレックスを打ち明けた。深く持っているコンプレックスが方桐の抱えている深刻なトラウマだと推測できる。最後に、「蜂蜜のパイ」では、主人公淳平とは、大学時代に「三人組」（P188）だった小夜子と高槻が、淳平の帰国中「深い仲になつ」（P170）た。小夜子を「自分が探し求めていた女性」（P170）だと言えなかった淳平は、小夜子を高槻に取られたあと、孤独に取り残され、数日間「雲の上を歩いているような気持ちで過ごした」（P171）。授業などの無断欠席をし、「孤独に一生を終える」（P171）ことまで考えた。このように、「雲の上を歩いているような気持ち」（P171）になったのは PTSD の症状と考えてもよい。淳平が PTSD の症状に罹っている間、小夜子が淳平の様子を心配して訪ねて来た。そこで、「小夜子を抱いて唇をかさねたこと」（P175）により、「自分が探し求めていた女性」（P170）の小夜子と親密な関係が出来た淳平は「しかるべき場所に落ちついた」（P175）と思うようになった。しかし、その後、小夜子が高槻の二人が結婚した。このように、「自分が探し求めていた女性」（P170）の小夜子を、親友の高槻に取られたことは、ずっとトラウマとして淳平の心に傷を残していたのである。

4.3 各主人公が抱えたトラウマへの対処

では、こうしたトラウマに登場人物はどのように対処したのか。「UFO が釧路に降りる」では、妻の家出でトラウマを抱えた小村は、釧路に着いた後、迎えに来てくれたシマオという登場人物と会話中、「きっと奥さんのことが好きだったんですね？」(P22) と1回目に聞かれた時に、「答えを避けた」(P22)。そして、2回目に「奥さんのことを考えていたんじゃない？」(P33) と聞かれた時に、「『うん』と小村は言っ」(P33) て、言えなかったことを口に出す形で妻の家出で起きたトラウマと向き合うようになった。作品の終盤で「遠くに来たような気があまりしない」(P21) と言った PTSD の症状から、「ずいぶん遠く来たような気がする」(P37) へと、感覚が徐々に確かになってきた所で物語は終わる。しかし、最後にシマオが言った「でも、まだ始まったばかりなのよ」(P37) の一句は人生がトラウマ克服の連続であることを意味するであろう。「アイロンのある風景」で冷蔵庫への恐怖を感じた三宅は、「一人暮らしをして絵を描いている」(P51)。そして、「部屋の中にアイロンが置いてある。それだけの絵」(P63) を描く。こうして屋外の「焚火」が象徴する暖かさを屋内の「アイロン」の絵で表現したことは、三宅のトラウマへの対処方法である。もし描画をトラウマ解消方法に使わなければ、順子に「(きれいにからっぽのことを・論者注) どうしたらいいのか？」(P64) と聞かれた三宅が、「ぐっすり寝て起きたら、だいたいはなおる」(P64) とアドバイスをすることはできないであろう。

同じく「神の子どもたち」で、善也は夜の帰りに、父らしき人の後を尾行し、人気のない野球場に辿り着いた。その時、大学時代に「踊り方が蛙に似ていた」(P90) と言われて傷ついたが、「草のそよぎと雲の流れにあわせて踊った」(P92) 善也は、母親との「近親相姦」の邪念を意識し、「僕らはそのかたちなきものを、善きものであれ、悪しきものであれ、どこまでも伝えあうことができたのです。神の子どもたちはみな踊るのです」(P95) と思い出すと同時に、かつて「お父さんである神様」(P82) への信仰を捨てた善也は、「神様」

(P95)と口に出して言った。こうして善也は、語り出すことで「父殺し」と母親との「近親相姦」という人間存在の原罪としての根源的トラウマと向き合うようになった。また、「タイランド」では、夫を30年間憎み続けたトラウマを持つさつきは、老女の占いを受けた後、「身体の中に白い堅い石が入っていることを認識した」(P121)。また、「男が苦悶にもだえて死ぬことを求めた。そのためには心の底では地震さえをも望んだ。ある意味では、あの地震を引き起こしたのは私なのだ。あの男が私の心を石に変え、私の身体を石に変えたのだ」(P122)と結論を出した。このようにして、他者の話をきっかけに奥深い所に潜む夫への憎しみというトラウマに向き合うようになった。同時に、「かえるくん、東京を救う」で平凡以下人間だと自覚している方桐は、「筋の通った、勇気のある方です。東京広しといえども、ともに闘う相手としてあなたくらい信用できる人はいません」(P139)とってくれたかえるくんの一言で、深刻なコンプレックスから救われた。最後に、「蜂蜜のパイ」でも、友人に小夜子をとられたことがトラウマとなっている淳平は、離婚後の小夜子との身体的接触により、「19歳のときからものごととは何ひとつ変わっていないみたいなのに思えた」(P197)安心を得て、「夜が明けて小夜子が目を覚ましたら、すぐに結婚を申し込もう」(P200)と決心を固めた。こうして、淳平は19歳から36歳まで抱えてきたトラウマを克服することになった。

「蜂蜜のパイ」以外の5作品とも、心にあるトラウマを最後に克服できたかどうかは、明確な答えを得られないまま、物語は終わっている。これだけを見ると、確かに各短篇の結末だけに注目して中野潤が言った「ばらばらな状態からの再生はやはり<悲観的な希望>としてしか描き得なかった」⁴⁴ことになるかも知れない。しかし、ここでは、むしろ村上春樹は、団塊の世代や団塊ジュニアのありふれた市民を主人公にしている点に注目すべきであろう。この連作で

⁴⁴前掲中野潤論文 P74

は、再生の完成度や達成度を論じるよりも、震災を契機に主人公たちが今まで心に抱えたまま気づかないで解決の糸口すら見出せなかった深刻なトラウマを、それぞれが何らかの方法でトラウマと向き合うことで、トラウマの存在に気が付き、そこから次のステップへという行動の展開が見られる点に注目すべきである。これは、中野潤が言った<悲観的な希望>というより、むしろ市井の庶民の日常での静かな可能性、平凡ではあるが、一市民として生き抜くことにつながる積極性が見られる点をむしろ高く評価すべきではないだろうか。

5. 「我々を温め励ます「モラル」のようなもの」の実態—結びに代えて

阪神大震災 5 年後の 2000 年に刊行した『神の子どもたち』に収録された 6 作品の主人公たちは、トラウマと向き合い、それを認識するという点で共通している。『神の子どもたち』が刊行された時代背景については、中井久夫は、「一九九五年以後の日本は格段に外傷に敏感になり、災害や事件があると、常に被害者の『こころのケア』がどうなっているかが問われるようになりました」⁴⁵と述べている。また、斎藤環はトラウマ文学が 90 年代後半から人気を集めた⁴⁶としている。こういった時代背景において、村上が自ら明らかにしたように『神の子どもたち』で描きたかったのは、「我々を温め励ます「モラル」のようなもの」である。これを『神の子どもたち』が持つ共通的なテーマであるトラウマと一緒に考えると、「我々を温め励ます「モラル」のようなもの」とは、まさしく戦後神話が崩壊していく中、時代を支えてきた団塊の世代とその子どもたちの歩みと共に、人間の心に深く埋もれた心の声あるいは傷、いわば主人公にとってそのままでは放置できないにも関わらず気づかないで済ませてきた

⁴⁵中井久夫 (2005) 「日本社会における外傷性ストレス」『関与と観察』みすず書房

⁴⁶前掲斎藤環書 P253

深刻なトラウマと向き合うことの重要さそのものだと言えよう。トラウマと向き合うという課題は、村上春樹のその後の創作の中で、「父殺し」と母親との「近親相姦」をトラウマとして持つ15歳の少年カフカを主人公にした『海辺のカフカ』（2002）にも、トラウマを各自抱えた主人公天吾と青豆がそれを乗り越えて20年ぶりの再会を果たした『1Q84』（2009-2010）にも、「ナイーブな傷つきやすい少年としてではなく、一人の自立したプロフェッショナルとして、過去と正面から向き合わなくてはいけない」⁴⁷メッセージが込められた最新作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（2013）にも、ずっと受け継がれているテーマである。トラウマは、4.1節で触れたように、その性質上、今まで気づかなかった状態から何らかの形で向き合い、その存在を認知することが実は次のステップを導くという弁証法的構造を持っており、その過程を通過儀礼として見ることができる。『神の子どもたち』を創作する際、村上が考えた「我々を温め励ます「モラル」のようなもの」とは、トラウマの克服の程度や成果はともかく、まず存在に気が付きトラウマと向き合うことに意味があるという明確な意思表示である。トラウマとその認識という物語の装置がその後の村上文学で次第に明確なテーマとなってきたのは、村上自身の受けた1995年の衝撃的な震災の事実があり、それを凝縮した結晶にほかならないからであろう。

さまざまな惨劇や悲劇を経た個々人のトラウマの問題は、ハイリスク社会と言われる世界共通の問題であり、極めて現代的な課題である。その点で『神の子どもたち』の記念碑的意味を持っているとも言えよう。

（本論文は、淡江大学日本語学科「村上春樹研究室」によって主催した「2013 第2回村上春樹国際学術研討会」（2013年5月5日）で口頭発表した論文を加筆、修正したものである。）

⁴⁷村上春樹（2013）『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』文藝春秋 P106

airiti

テキスト

村上春樹 (2000) 『神の子どもたちはみな踊る』 新潮社

参考文献

(一)機関雑誌・書籍

- 田中勝(1985)『感性時代のニューシーンメーカー 団塊ジュニアの総合研究』日本能率協会総合研究所
- 中井久夫編(1995)『1995年1月・神戸「阪神大震災」下の精神医たち』みすず書房
- 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③短篇集Ⅱ』講談社
- 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑤ねじまき鳥クロニクル2』講談社
- 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑥アンダーグラウンド』講談社
- 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑦約束された場所で村上春樹、河合隼雄に会いに行く』講談社
- 中井久夫 (2005)『関与と観察』みすず書房
- 清水良典 (2006)『村上春樹はくせになる』朝日新聞社
- 斎藤環 (2008)『文学の断層セカイ・震災・キャラクター』朝日新聞社
- (2011)『現代思想 imago 臨時増刊』39巻12号青土社
- 河出書房新社編集部編(2012)『歴史としての3・11』河出書房新社
- 鈴木哲発行(2012)『それでも三月は、また』講談社
- ファン・ヘネップ著綾部恒雄・綾部裕子訳(2012)『通過儀礼』岩波書店
- 宇佐美毅・千田洋幸編(2012)『村上春樹と一九九〇年代』おうふう
- 宮地尚子(2013)『トラウマ』岩波書店
- 村上春樹 (2013)『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』文藝春秋

(二) インターネット資料

「平成 20 年厚生労働白書」

<http://www.mhlw.go.jp>

「我が国における「団塊の世代」退職及び少子高齢化が、経済・金融に与える影響について」

<http://www.mof.go.jp>

NHK 科学文化部のブログ「完全版：村上春樹さんカタルーニャ賞受賞スピーチ」

<http://www9.nhk.or.jp/kabun-blog/200/85518.html>

「村上春樹カタルーニャ国際賞スピーチノーカット音源ー1」

<http://www.youtube.com/watch?v=Hxw50NkWFuE>

「村上春樹カタルーニャ国際賞スピーチノーカット音源ー2」

http://www.youtube.com/watch?v=_yTdiHrYid4

- Arnold van Gennep.(1909) *Les rites de passage*. E. Nourry, Paris, E. Nourry, rééd. 1981. Trs. by Ayabe,T.& Ayabe,Y.(2012)*Tsuka Girei*. Iwanami shoten, Japan.
- Kawade shoboshinsha Henshubu.(Eds.) (2012)*Rekishi to shitenno 3・11*. Kawade shobo shinsha, Japan.
- Miyaji,H.(2013)*Torauma*. Iwanami shoten, Japan.
- Murakami,H.(2003) ”Kaidai”. *Murakami Haruki zensaskuhin1990～2000 Vol.3Tanpenshu II*. Kodansha, Japan.
- Murakami,H.(2003) ”Kaidai”. *Murakami Haruki zensaskuhin1990～2000 Vol.5 Nejimakidori Kuronikuru 2*. Kodansha, Japan.
- Murakami,H.(2003) ”Kaidai”. *Murakami Haruki zensaskuhin1990～2000 Vol.6 Andaaguraundo*. Kodansha, Japan.
- Murakami,H.(2003) ”Kaidai”. *Murakami Haruki zensaskuhin1990～2000 Vol.7 Yakusokusareta Bashode:Murakami haruki, Kawai Hayao ni ainiiku*. Kodansha, Japan.
- Nakai, H. (2005) *Kanyo to Kansatsu*. Misuzu shobo, Japan.
- Nakai,H.(Eds.)(1995)*1995nenIgatus Kobe”Hanshin Daishinsai”kano seishinitachi*. Misuzu shobo, Japan.
- Saito,T. (2008) *Bungaku no Dansousekai,Shinsai,Kyarakuta*. Asahi shinbunsha, Japan.
- Seidosha.(Eds.) (2011)*Gendai shiso:Imago Rinjizokango*, Vol.39,No.12.Seidosha,Japan.
- Shimizu,Y. (2006) *Murakami Haruki ha Kuseninaru*. Asahi shinbunsha, Japan.
- Tanaka,M.(1985)*Kanseijidai no Nyusiinmeikaa:Dankaijyunia no Sogokenkyu. Nihon noritsukyokai sogokenkyusho,Japan*.
- Usami,T.& Senda,H.(Eds.)(2012)*Murakami Haruki to 1990 nendai*. Oufu, Japan.

※2013年8月31日受理 2013年10月26日審査通過